会員投稿　　『馬電周辺の歴史を訪ねて』　　新田町 増田英一

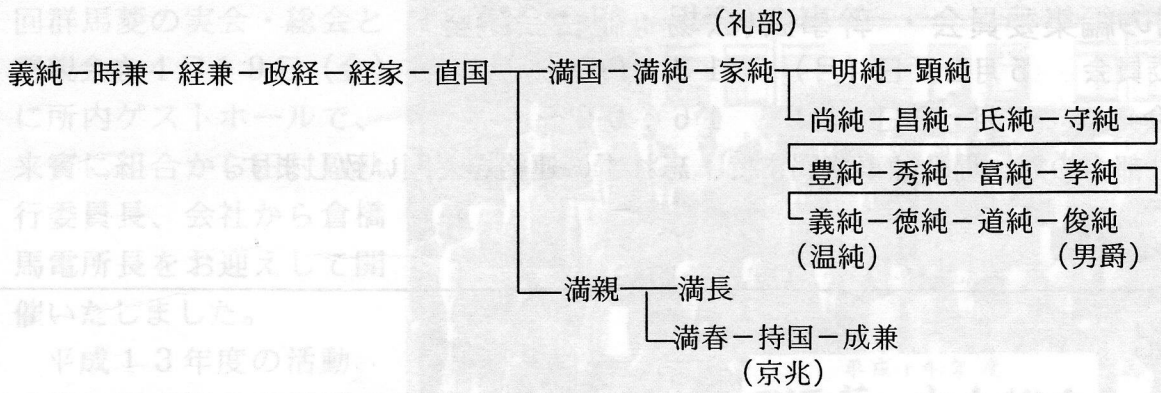
私は平成１３年４月『菱の実会』に入会いたしました新田町の増田です。
馬電から関西支社・本社を経由して、再度、馬電で定年を迎えたものです。
生まれは、地元、尾島町ですが現住所は新田町です。趣味は『古書画の研究と収集』で、この道、３０年の実績があります。
現在、新田町の史談会に属し、その研究成果を発表している今日この頃です。
従いまして、皆様の中で眠っている古書画で何だか分からない掛軸等がありましたらご一報ください。『菱の実会』の会員に限り無料で鑑定いたします。

さて、このたび編集責任者から強引な執筆依頼がありましたので『馬電周辺の歴史を訪ねて』と題して３回シリーズもので掲載させていただきます。
その第１回は地元中の地元『新田岩松氏と猫絵について』です。第２回は私の故郷尾島町の『花見塚』のつつじが館林の花山に移植され現在の『つつじケ岡公園』ができているという内容です。そして第３回は私の現住所、新田町の上州画家『柿沼山岳』について述べることにいたします。ご期待ください。

それでは本題に入ります。

第１回　新田岩松氏と猫絵について

岩松氏系図



岩松氏は新田氏と足利氏の両系統の血を引き継ぐ名家で、足利義純の子、時兼を祖とする。母は新田義重の娘で、時兼は建保３年(１２１５)と元仁元年(１２２４)の両度にわたり祖母である新田義重の後室より上野国新田庄のうち岩松郷など１３郷を譲与されて、地頭職を任ぜられ岩松に住んで岩松氏を称したという。
そして、南北朝時代には足利氏に組し、満純の時、上杉禅秀に加担して敗れ、その後、満純の系統(礼部家)と持国の系統(京兆)に分かれた。満純の子、家純が文明元年(１４６９)金山城を築き武蔵国五十子に館を構え、東上州一円を支配下に入れたが、のちに家臣横瀬氏(後の由良氏)に権力を奪われてしまった。
そして、由良信濃守国繁が後、北条氏に敗れ天正１４年(１５８６)の金山落城とともに、岩松守純は上野国桐生の竜泉寺に退居した。しかし、その４年後、天正１８年(１５９０)徳川家康の関東入部の時、守純は子の豊純を伴って川越城で家康にはじめて拝謁したという。
そして、家康より二十石を賜い、新田郡市野井感応寺曲輪に居住し、その後、世良田へ移っている。寛永１８年(１６４１)に新田の称号を改めて岩松に復し、のち代々これを称した。
秀純(１６１９～１６７６)の時、徳川家光の十三回忌にあたる寛文３年(１６６３)に忍藩主阿部豊後守の推挙によって１００石加増され、知行高１２０石となり、新田郡下田島に屋敷地を拝領した。

（来月号につづく）

会員投稿　　『馬電周辺の歴史を訪ねて』　　新田町 増田英一

先月号から続く

この広さは雑木林を含め２万６８７４坪であった。(現在はその一部が県立太田西女子高校となっている。尚、この『太田西女』の前身は馬電北側にあった『太田女子高校尾島分校』である。)その後、明治に入って、再び新田姓となり、新田俊純は新田義貞挙兵５５０周年にあたる明治１６年(１８８３)に華族に列せられた。また、従五位に叙せられ、宮中に参内し、天皇に拝謁した。そして、明治１７年の華族令の公布によって男爵となった。なお、守純以後の歴代の殿様は『岩松満次郎』を襲名した。

守純以降は、豊純、秀純、富純、孝純、義寄、徳純、道純、俊純と受け継いだ。

最後の殿様『俊純』は文政１２年(１８２９)生まれであり、没年は明治２７年(１８９４)で７５歳であった。

次に『猫絵』について述べることにする。

新田の殿様は、現在の群馬、埼玉、長野の養蚕生糸の盛んな地域で、江戸時代に『猫絵の殿様』として知られていた。養蚕の盛んな地域では、養蚕飼育の上で鼠（ねずみ）は大敵とされ、この新田の猫絵が鼠除けの効果があるものと信仰されていた。そして、１８世紀末頃から養蚕生糸が盛んになるにつれて猫絵を所望する人々が多くなり、義寄、徳純、道純、俊純の四代の殿様が養蚕農民からの要望で猫絵を描いていたのである。また、鼠の害が新田家の怨霊によるという言い伝えがあり、これを鎮めるため、養蚕地域で猫絵が歓迎されるようになったともいう。

この猫絵は江戸にも知られており、１９世紀中頃の嘉永、安政の頃に書かれた『真佐喜のかつら』の筆者青葱堂冬圃は『上野国新田郡岩松氏の絵がきたる猫の絵を張をけば鼠出ずともてはやしぬ、されど世うつりはて験も失せるにや』と記し、猫絵を張れば鼠が出てこないと、もてはやされていたが、最近ではその効能が失せていると皮肉っている。

それでも、猫絵は養蚕農民には『蚕の神様』として重宝がられ、たとえば、俊純は文化１０年（１８１３）の９月から１０月までの約1ヶ月間に猫絵を９６枚描いている。この、最後の殿様であった幕末の岩松俊純は、明治に男爵となり、ヨーロッパでは『バロンキャット』（猫の男爵）と呼ばれていた。横浜の開港以降、蚕種を海外に輸出する際には鼠害を避けるために蚕種とともに猫絵もヨーロッパに輸出されていたのである。この猫絵はこの地域にも多数残っていたが、県立博物館や美術館及び近郊の官公庁等が買い占め、最近では手に入らなくなってしまった。それでは、私の所有品と新田町所有品の『猫絵』をご紹介し、結びとする。（終わり）

【筆者・所有品】

徳純 画
【1777～1825】

桐生市 町屋 … 海野花子